

## サウジアラビアで女性の自動車運転が解禁



(一財) 日本エネルギー経済研究所 中東研究センター 研究理事 保坂 修司

### はじめに

2018年6月24日はサウジアラビアにとって歴史的な日となった。深夜、日付が変わって24日になると同時に、サウジアラビア各地では多くの女性たちが自動車に乗り込み、みずから運転をはじめたのである。

ご存じの人も多いと思うが、サウジアラビア当局はこの日まで女性による自動車の運転を禁止してきた。女性が自動車を運転できないというのは現代社会においてサウジアラビア以外なかったであろう。ターリバーン統治下のアフガニスタンでは女性は事実上、自動車の運転ができなかったようだが、そのターリバーンも今は政権の座にない。テロ組織イスラーム国 (IS) の支配していたイラク西部のモスルですら、実は女性は自動車の運転ができたといわれている<sup>(1)</sup>。

サウジアラビアでは6月4日に女性たちへの免許交付がはじまっており、解禁と同時に運転を開始したのは、こうしたすでに免許をもっている女性たちであった。サウジアラビアでは外国で自動車免許を取得している女性も少なくない。サウジアラビアで最初に公式のかたちで運転した女性たちの多くは、こうした外国免許からの切り替え組であろう。今後ますます多くのサウジ女性たちが自動車運転免許を取得し、仕事や買い物、娯楽に自動車を利用していくにちがいない。

なお、ちょうど同じ日、F1のフランス・グランプリが行われる南フランスのポール・リカール・サーキットでは、決勝レース開始前にサウジ女性、アシール・ハマドがロータス・ルノーE20を運転するパフォーマンスを行い、自動車を運転できるようになったサウジ女性たちを祝福した。これも象徴的なイベントといえる。

その日のサウジアラビアの新聞はもちろん全紙、女性の運転解禁のニュースを一面だけでなく、数ページにわたって大きく扱っていた。また、ツイッターなどソーシャルメディア (SNS) でも女性たちが運転している模様が静止画や動画をつけて数えきれないぐらい

---

(1) ‘Umar al-Jabūri, “Tanẓīm «al-Dawla» fi al-Mawṣil Yasmaḥ li-al-Nisā’ bi-Qiyāda al-Sayyāra,” *al-Quds al-‘Arabī*, May 25, 2015.

投稿されている。

この歴史的な日からすでに1ヵ月以上経過しており、そろそろ状況も落ち着いたころであろう。本稿では、これまでの情報のある程度整理しながら、女性の自動車運転解禁の経緯や解禁後の動き、また運転解禁の社会や経済に対するインパクトなどを分析していくつもりである。

## 最高命令

サウジアラビアのサルマン国王は2017年9月26日、内相にあてて、翌年6月から女性に自動車運転免許証の交付を許可する最高命令 (amr sāmī) を発布した。そして、この命令を実施に移すため、内務省、財務省、労働社会開発省からなるハイレベル委員会が必要な措置の検討を開始したという。

上述のように、サウジアラビアでは事実上女性は車の運転ができず、重大な人権侵害だと国際社会から批判を受けていたため、たとえば、米 국무省のノーアート報道官は「これは正しい方向への大きな一歩だ」と述べ、今回のサウジアラビアの決定を歓迎した。これからもわかるとおり、サウジの人権状況に懸念を表明していた西側諸国からも、このサルマン国王の決定については一様に歓迎の意が表明された。

なお、「最高命令」という用語について、筆者は恥ずかしながらこのときまで聞いた記憶すらなかった。サウジアラビアでは国王に関わる命令や指示に al-Amr al-Malakī, al-Marsūm al-Malakī, al-Tawjih al-Malakī, al-Amr al-Sāmī, Qarār Majlis al-Wuzarā' などいくつかの種類がある。便宜上、順にこれらを王令、王命、王告、最高命令、閣僚会議決定と訳しておく。これらのうちもっとも強力なのは王令で、国王が国家元首としての署名入りで直接に発する公式の命令を指す。他方、最高命令は、形式は決まっていないものの、閣僚会議議長（首相）あるいは副議長（副首相）の資格で国王あるいは皇太子が発する命令ということになる<sup>(2)</sup>。したがって、格としては王令に準ずるものといえよう。なぜ、女性の運転解禁が王令や王命ではなく、最高命令となったのか、その理由は不明である。だが、女性の運転解禁のイニシアティブをとっていたともいわれているムハンマド皇太子の役割を含意した可能性があるのかもしれない。

---

### 筆者紹介

慶應義塾大学大学院修士課程修了。在クウェート日本大使館・在サウジアラビア日本大使館専門調査員、中東調査会研究員、近畿大学教授等を経て現職。主な著書に『乞食とイスラーム』（筑摩書房）、『サウジアラビア』（岩波新書）、『オサマ・ビンラディンの生涯と聖戦』（朝日新聞出版社）、『イラク戦争と激動する中東世界』（山川出版社）、『サイバー・イスラーム』（山川出版社）、『ジハード主義』（岩波書店）等。

---

---

(2) “al-Fariq bayn al-Amr al- al-Malakī.. al-Marsūm al-Malakī.. al-Tawjih al-Malakī.. al-Amr al-Sāmī.. Qarār Majlis al-Wuzarā’,” ‘Ukāz, Yūniyū 18 2017. 実際、最高命令テキストには、国王の名前とともに閣僚会議議長（首相）の職名が付されている。

## サウジアラビアにおける女性の運転

サウジアラビアでは従来、女性の自動車運転を禁止する明文化された法律はなく、単に慣習上女性には自動車の運転免許を交付してこなかったとされる（事実上明文化されたのは1991年のことと考えられている）。ただし、都市部以外では、女性が必要上、車を運転することも散見され、その場合は黙認されることも少なくなかった。

サウジアラビアは公共交通機関が未発達な典型的な自動車社会である。短距離も含め、移動には自動車が不可欠といえる。またバス網などがあっても、一般にサウジ人のあいだでは、バスは外国人労働者の乗り物との認識があり、サウジ人、とくにサウジ人女性が積極的に利用するものではなかった。

それゆえ、運転できない女性たちは通学、通勤、買い物、子どもの送迎などで必然的に不便を強いられてきた。これまでサウジ女性が、自動車を利用しなければならない場合、男性親族（父、夫、兄弟、息子等）の運転する自動車で連れていってもらうか、タクシーを利用するか、外国人労働者のドライバーを雇うかぐらいしか選択肢がなかったのである。近年ではウーバー（Uber）やそのアラブ版ともいえるカリーム（Careem）のような配車サービスを利用して遠出することも少なくなき、その点では若干ではあるが、不便さは解消されつつあった。

20世紀までは女性の自動車運転が許されない理由として宗教的な根拠が挙げられることが多く、実際、宗教界の保守派は、女性の運転に反対する立場からしばしばこの問題について発言をしており、この動きは近年までもつづいていた。しかし、サウジアラビアのイスラームが法源とするクルアーンやハディースのなかに女性の自動車運転を禁止すべきであると解釈できる文言があるわけではない。一般に宗教界が懸念を示しているのは、女性に外出機会が増えることで、女性が親族以外の男性と接触する機会が増える可能性が出てくるという点である。

たとえば、サウジアラビアの最高宗教権威であったアブドゥルアジーズ・ビン・バース前総ムフティーは「シャリーアでは悪行にいたる原因をすべて禁止。女性がみずから車を運転したりすれば、親族以外の男性と会ったり（ハルワ khalwa あるいは khulwa やイフティラート ikhtilāt）、ベールを外したり（スフール sufūr）する「悪行」につながる恐れがある」と述べ、女性が自動車を運転することは許されないとの立場をとっていた<sup>(3)</sup>。また、これと並んで、「女性は男性後見人といっしょでなければ外出してはならない」とのハディースも頻繁に引用される。ただし、これらを厳密に適用すると、女性がタクシーに乗ることも、自分たちで雇用した運転手の運転する車に乗ることさえもできなくなってしまう。

---

(3) <https://binbaz.org.sa/old/28966>（2018年7月31日閲覧）

逆に女性の運転賛成派は、預言者ムハンマドの時代、女性がラクダや馬に乗っていたことを挙げ、同じ移動手段である自動車の運転を禁止すべきではないと反論していたが、状況は一向に改善しなかった。そのため、一部のサウジ女性たちはしばしば実力行使に出たのである。たとえば、1990年11月、女性たちが首都リヤドで自動車運転デモを行った。約50人の女性がみずから自動車を運転し、リヤド市内をめぐる、運転許可を政府に要求したのである<sup>(4)</sup>。

実はこの年の8月2日、イラクがクウェートに侵攻し、その後米軍を中心とする多国籍軍がサウジアラビアに駐留することとなった。それにともない米軍などの女性兵士が顔や髪の毛を出したまま街中を闊歩し、車の運転までしていたのである。さらに、世界中のメディアが取材のため、サウジアラビアに集まっていたことも重要であった。女性たちが、これを自分たちの要望を政府や国際社会に伝えるための好機ととらえたのはまちがいない。また、世界が注視するなか、サウジ政府もそれほどひどいことをするまいと目論んでいたことも否定できないだろう。

しかし、結果は正反対であった。当局は彼女たちを拘束し、厳しい取調べを行ったのである。結局、彼女たちは、職場を追われたり、旅券を押収されたりするなど、激しい弾圧を受けてしまう。しかも、こうした弾圧は、当局だけではなかった。彼女たちの多くが働いていた大学やモスクなどでも、彼女たちだけでなく、その家族を「世俗主義者」「悪魔主義者」と非難する怪文書が出回るなどしたため、彼女たちやその家族の多くが切迫した身の危険を感じるほどであったという。当時のサウジ社会はまだ女性が自動車を運転するのを受け入れる下地ができていなかったのである。彼女たちが真に恐れていたのはこうした社会的抑圧のほうであったとも考えられる。この事件をきっかけに当時の最高宗教権威、ビン・バズが1991年に出した「裁定」(ḥukm) が前に紹介した同師の発言である。

## アブダッラー国王時代の変化

しかし、1990年代なかごろに当時のファハド国王が病に倒れ、アブダッラー前国王が、皇太子として実権を握るようになって以降、状況は徐々にではあるが変わってきた。とくに2001年の9.11事件や2003年以降のサウジ国内でのテロの頻発で、宗教界保守派に対する風当たりが強まり、彼らの力に陰りが見えはじめたことも、関係したのであろう。アブダッラー時代には、当局側が女性の運転不許可の理由として宗教的な理由を挙げることで自体が減少し、代わりに保守的なサウジ社会が女性の運転を受け入れられないからというのが理由として挙げられるようになっていた。とくにアブダッラー前国王が、女性の自動車

---

(4) ちなみに、彼女たちは大学の教員などで、全員外国で正規の運転免許を取得しており、運転技能的には問題なかった。

運転を肯定的にみる発言をしたことは、運転解禁が近づいていることを多くの人たちに期待させたといっている。

しかし、実際の道のりは険しかった。2008年の「世界女性の日」にはサウジの女性活動家、ワジーハ・ホワイデルがみずから自動車を運転している様子をYouTubeにアップロードし、注目を集めた。これをきっかけに、多くのサウジ人女性がインターネット上で賛意を表明したり、車の運転デモを行ったりするようになった。

たとえば、2011年にはやはりサウジ人の女性活動家マナール・シャリーフが、みずからサウジ国内で運転している様子を撮影し、ユーチューブにアップして、内外の注目を集めた。

2014年には、UAEの自動車免許を保持する活動家のルジャイン・ハズルールが、UAEからサウジアラビアに陸路国境を越えて入った様子をユーチューブに投稿、これもSNS上で大きな話題となっていた。その後何度も国王らに対し運転許可を求める建白書が出されるなどの動きがみられたが、いずれも不発に終わっている。

残念ながら、アブダッラー前国王時代には女性の自動車運転は解禁されなかった<sup>(5)</sup>。当時のインターネット上の議論をみると、この問題に関しては男女を問わず、賛否両論であったことがわかる。しかし、このころには一部のイスラーム法学者や宣教師たちからも、女性の運転を許可すべきだとの声上がるようになっていた。たとえば、かつてはアルカイダ支持者ともいわれていた、過激な言説で知られる説教師、アーイド・カルニーは、女性の運転に反対する法学者たちに公然と反論し、女性の運転を禁止することには何の根拠もないと主張している。

また、イスラーム法学者のアフマド・ビン・バースも「女性の運転はイスラームが付与した権利の問題であり、そこには所有の権利、移動の自由の権利などが含まれている」と主張している。アフマドは、名前からもわかるとおり、女性の運転を禁止する裁定を下した総ムフティー、アブドゥルアジーズ・ビン・バースの息子である。世代が代われれば、状況が変化するのも当然ということであろう<sup>(6)</sup>。

サルマーン現国王の実の息子であるムハンマド・ビン・サルマーン皇太子（以下 MbS）も、副皇太子時代から、女性の自動車運転には肯定的な発言をしており、さらに女性の運転を含む女性の権利拡充に関し宗教界と議論を進めていることも示唆していた。しかし、

---

(5) ファッション誌 Vogue のアラビア版では、解禁直前にアブダッラー前国王の娘、ハイファー王女の女性問題に関するインタビューが掲載された。このインタビューのなかで王女は「この国には変化を恐れる保守層が一定数存在する。わたしは個人的にはこれらの変化を熱狂的に支持している」と答え、みずからも運転する意思を示している。

(6) 実際、このころには解禁が近いのではないかとの憶測がずいぶん流れていた。たとえば、Yūsuf al-Hazzā', "Anbā' 'an al-Samāḥ li-Qiyāda al-Mar'a al-Su'ūdiyya li-al-Sayyāra khilāl Shahrāyn," *Īlāf*, Ibrīl 20, 2010を参照。

実際に女性の自動車運転解禁が現実味を帯びてきたのは、やはり MbS の一連の発言があってからであろう。

とはいえ、アブダッラーが実権を握って以降の「自由化」「穏健化」時代にあっても、保守派からは女性の運転を禁止すべきだとの発言は相次いでいた。サウジアラビアの最高宗教権威である最高ウラマー会議メンバーでもあるサーリフ・ルヘイダーンは「女性の運転は卵巣に影響を与え、骨盤を上押し上げることになる。そのため、日常的に運転している女性にはさまざまな程度の障害をもつ子どもが生まれる」と「科学的な」説明をしようとした。

さらに運転解禁の最高命令が発出される少し前の時期ですら、サウジ南部アシール州ファトワー局の長であったサアド・ヒジュリーというイスラーム法学者が「女性は知性（‘aql）が男性の半分しかない。交通局が知性の半分しかない男に免許を与えたら、どう思うか。女性に半分の知性しかないとしたら、どうして運転免許を与えられよう。市場（sūq）にいけば、彼女の知性は4分の1になってしまう」と言い放っていた。

これらの発言は、この問題に対する保守派の反対がまだそれなりに大きいことを意味している。しかし、こうした発言が、SNSだけでなく、サウジアラビアの公式メディアで否定的に扱われるようになった点は見逃せない。潮目がすでに変わっていたといえる。ルヘイダーンの発言に対しては、有名なサウジ人の若手コメディアン（ユーチューバー）のヒシャム・ファギーフがユーチューブ上で「No Woman No Drive」という歌で反撃をしている<sup>(7)</sup>。また、サアド・ヒジュリーに関しては、SNS上で彼の発言に反発する投稿があいつぎ、結局彼は、アシール州のフェイスル州知事より説教や礼拝の先導、その他の宗教活動を禁止されてしまう<sup>(8)</sup>。

## サウジ・ビジョン2030と女性の役割

MbS が2016年に発表した脱石油依存経済のイニシアティブである「サウジ・ビジョン2030 (Saudi Vision 2030, 以下「SV」と略)」では、実は社会における女性の役割が重視されている。サウジアラビアにおける女性の地位は、宗教的な制約だけでなく、社会的

---

(7) <https://youtu.be/aZMbTFNp4wI> (2018年7月31日閲覧)。もちろん、この歌はボブ・マーリーの有名な曲「No Woman No Cry」のパロディーである。ファギーフは冒頭で、サウジでは楽器を用いるのが許されないので、アカペラで歌うと宣言している。これは、いわゆるワッハーブ派（サラフィー主義者）に共有された、楽器を使って奏でる音楽は許されないという認識にもとづいている（ただし、ワッハーブ派の祖であるムハンマド・ビン・アブドゥルワッハーブは音楽を禁止しているわけではない）。また歌詞のなかに、女性は運転しないから、卵巣も安心だし、子どもをたくさん産めるとの文言がある。これらは、いずれも保守派のイスラームを皮肉ったものといえる。

(8) たしかにSNS上では彼を非難する投稿が圧倒的であったが、実際にはわずかながら彼を擁護する投稿もあった。このことは、サウジ人のあいだでは男女を問わず女性の運転に否定的な声があることを示している。

な制約も受けている。サウジアラビアにおける失業率は2017年第2四半期で12.8%であるが、実は男女でわけてみると、男性が7.4%、女性は33.1%と大きく開きがある。一方、大学進学率は女性のほうが高い。失業率では数字上、女性が圧倒的に深刻であることがわかる。雇用の改善は、SVの重要な柱であり、実際、女性の社会進出についてSVの公式文書では、以下のように謳われている（引用は公式テキスト日本語版より）。

「労働力に占める女性の割合を22%から30%に

「我が国では、老若男女を含めたすべての国民に機会を提供し、各自が最高の形で社会に貢献できるような経済のあり方を奨励しています。

「サウジアラビアの女性もまた、社会において欠かせない存在です。大学を卒業した人口の50%以上が女性であるという事実をふまえ、国家では女性の能力開発や生産能力への投資を通じて彼女たちにより良い未来を提供し、今後の社会および経済の発展に貢献してもらいたいと考えています。」

数値目標もそうだが、このSVの精神を実現するためには、女性をめぐる労働環境を改善しなければならず、そのためにもっとも効果的で象徴的な政策が女性の自動車運転解禁であるのはいうまでもない。SVが公開されたのが2016年春であったが、この時点ですでに運転解禁は規定路線となっていたとみていいだろう。

## 運転解禁に対する宗教界の反応

最高命令のなかでは、命令発出に際し、最高宗教権威である最高ウラマー会議メンバーと相談したことが言及されており<sup>(9)</sup>、今回の決定は宗教界との協議を含め、慎重に下準備をしたものと推測される。最高命令発表と同時に、最高ウラマー会議はその公式ツイッターアカウントで「イスラームのシャリーア（イスラーム法）の定めにもとづき、国益と国民の利益を守る二聖モスクの守護者をアッラーがお守りくださりますように」とツイートし、今回の決定をエンドースする立場を示した。

ただし、サウジ国営通信SPAで報じられた最高命令および最高ウラマー会議のアラビア語声明テキストでは「最高ウラマー会議のメンバー「多数（*aghlabiya*）」の意見」という文言がみられた。これを、最高ウラマー会議メンバーに、少数ながら反対意見があったと解釈する向きもある。

実際、上述のように同会議メンバーには女性の運転に反対するものがいたことはたしか

---

(9) 上述したように、MbSは女性の運転問題に関し宗教界と協議していると述べていたが、この最高ウラマー会議との相談のことを指している可能性もあろう。

である。たとえば、「女性の運転を許可しなかった場合の否定的な影響と許可した場合の肯定的な影響を考慮」といった文言でもそれはうかがえる。このことは、女性の運転には悪い影響があるとの主張ともとれる。また、「女性の自動車運転許可に関するイスラーム法上の裁定はもともと許可であり、反対意見は根拠がなく、支配的な考えかたえではないという会議メンバー多数の意見」という文言もそうである<sup>(10)</sup>。

しかし、最高ウラマー会議というサウジ最高の宗教権威を根本から否定することは逆に宗教界からの反発を招きかねないので、最高命令のテキストは、宗教界ももともと女性の運転には反対ではなかったし、政府も、従来の宗教界の意見のある程度尊重したかたちで公益の観点から女性の運転を認めたというように読める形式になっている。

たとえば、声明のなかにある「ウラマーたちのファトワーは〔中略〕運転自体には反対しなかったし、いずれも運転そのものを禁じることはなかった」という文は、これまでイスラーム法学者が発したファトワー・裁定・意見とは明らかに矛盾しているようにみえる。これについて最高ウラマー会議事務局長のファハド・マージドはアラビーヤ放送とのインタビューで「女性の自動車運転禁止に関して最高ウラマー会議事務局からファトワーも声明も決定も出ていない」と断言し、会議メンバーの一部のファトワーは、会議全員がその問題に賛成していることを意味していない」と付け加えた。つまり、これまで出されたファトワーはあくまで個人の見解であり、最高ウラマー会議の総意ではなく、同会議では原則、女性の運転を禁止していなかったということだ。

さらにマージドは「再解釈の裁定 (al-aḥkām al-ijtihādiya) は時と場で変化する。状況が変化し、公益性が増加すれば、イスラーム法学者は、ファトワーを更新し、問題について再検討しなければならない」とまで述べている。つまり、過去に最高ウラマー会議のメンバーが個人の資格で女性の運転を禁じる裁定を下したことがあるが、それらはすでに時代遅れになっており、そうした裁定を出した法学者たちは、もう一度再検討して、新たなファトワーを出すべきであるというのである<sup>(11)</sup>。

もちろん、保守的な宗教界の一部からは抵抗があるものと考えられるが、ツイッターでの反応などをみるかぎり、多くの国民、とくに若い世代は男女とも決定を熱烈に支持しており、宗教界保守派といえども、それを覆すのは困難であろう。2018年6月の人事異動で新たにイスラーム問題相に任命されたアブドゥッラティーフ・アールッシェイフはかねてより女性の就労や自動車の運転について肯定的な発言を繰り返していた人物であり、政府公式の宗教機関から女性の運転に対する強硬な反対が出てくる可能性は低いだろう。

なお、サウジ当局は昨年ぐらいからイスラーム法学者や説教師たちを多数、逮捕拘束し

---

(10) 最高命令のテキストはきわめて晦渋であり、この部分は意識である。

(11) “Kibār al-‘Ulamā’: Lam Naṣdur Fatāwā Sābiqatan Taḥram Qiyāda al-Mar’a,” *al-‘Arabiya*, September 27, 2018



ている。このなかには、サルマーン・オウダやアブドゥルアジーズ・フォウザーンら著名な学者も含まれている。この逮捕が女性の運転問題と関係しているかどうかは不明である。だが、こうした動きのなかで多くの宗教関係者が、自分たちに逆らうことは許さないという政府側の断固たる態度を感じとったことであろう。

しかし、そうはいつでも、宗教的な保守派とされる層を中心に女性の自動車運転に反対するものは一定数存在する。SNS上ではサウジ人女性の喜びの声やそれを祝福するツイートが圧倒的だが、少数ながら反対意見もみられることは要注意であろう。実際、解禁直後のマッカでは、女性が運転していた自動車が放火されているという事件も発生した。今後、こうした事件がつづく可能性は否定できないだろう。

また、女性の自動車運転解禁を求めている男女の活動家が依然当局によって逮捕されており、彼らの処遇も今後の注目点となる。彼らの要求は、現在の政府の施策と一致しており、彼らの逮捕は理不尽にみえる。しかし、当局側は自分たちのイニシアティブでの運転解禁を強調しており、彼ら彼女たちからの圧力で政策が変更になるという図式は何としても避けなければならなかったのであろう。だが、実際、西側メディアはこれを捉えてサウジ現政権の開放政策の意図に疑問を呈するようになってきている。これは当然、深刻な人権侵害であり、国連人権高等弁務官事務所もサウジアラビアに対し拘束されている活動家たちの釈放を要求している。こうした圧力は今後も強まるであろう。

SNS上では今、素直に喜びを爆発させる人たち、より多くの自由を求める人びと、運転反対派などさまざまな意見が飛び交っている。また、サウジ女性たちのツイートのなかには、保守派の逆鱗に触れるものもないわけではない<sup>(12)</sup>。現時点では保守派は忍従を強いられているが、開放政策のスピードが速すぎる、あるいはレッドラインを超えたと彼らが判断した場合には、その怒りが暴発する恐れも否定できない。実際、MbSの側近として娯楽推進政策をリードしてきたアフマド・ハティーブ総合娯楽委員会議長が、女性の運転解禁直前に、解任されるという事件が起きた。同委員会の後援するイベントにおけるロシア・サーカス団の女性パフォーマーの衣装が不道徳すぎるというのが原因だったとの意見が有力であるが、もともとハティーブ自身、保守派を怒らせる発言を繰り返しており、うがった見かたをすれば、女性運転解禁まえに保守派に配慮した人事であったともいえる。

## 経済的な影響

いずれにせよ、女性の運転が解禁されれば、サウジ社会が劇的に変化することはまちがいない。とくに自動車など運輸交通関係の産業では、女性向けの自動車、そして自動車保

---

(12) たとえば、有名なサウジの女性ジャーナリスト、シーリーン・リファーイーは解禁直後、その様子をユーチューブに投稿したが、そのときの服装がふしだらだと保守派から激しい攻撃を受けた (<https://www.youtube.com/watch?v=Pb2UXH8B3Ho&t=21s> (2018年7月31日閲覧))。

険を含む関連商品の販売などで新たな需要が出てくる可能性もあるだろう。

SVでは、前述のように、2030年までに労働力に占める女性の割合を現行の22%から30%にまで拡大する目標を設定しており、そのためにも、運転解禁のみならず、女性に対する規制緩和を進めていく必要がある。とくに西側諸国からは、運転禁止と並んで、評判の悪かった後見人制度のさらなる緩和や撤廃が、政権にとっての今後の課題といえる。

他方、経済面での影響も注目される。一つは当然、女性が運転をはじめることから生じる直接的な影響である。運転許可命令が発出された直後に行われた世論調査によれば、運転解禁後、実際に運転をしたいとしている女性は7割から8割に上っており、約半数の女性が自動車を購入する意思を表明している<sup>(13)</sup>。2020年までに約300万人の女性が自動車を運転するようになるとの試算もあり、仮にその半分が新たに車を購入するとすれば、自動車市場は少なくとも今後数年間は拡大することになる（リースという手段も拡大する可能性がある）。

とはいえ、そう楽観的な意見ばかりではない。もともとサウジアラビアの経済そのものが、ここ数年の油価の低落や2018年からの付加価値税の導入などで、停滞気味であり、そう簡単に新しい自動車の購入というわけにはいかないだろう。また、ターゲットとなる女性たちがいっせいに免許を取得し、自動車を購入するわけでもない。ある試算では2018年には、初年度ということもあり、15から20%売り上げが増加し、その後若干鈍化するものの2020年代なかごろまでは増えつづけるともいわれている。

したがって、サウジ国内で販売している自動車会社は押しなべて女性をターゲットにした広告を打ち出すなど、女性を意識した政策をとりはじめている。日本メーカーでいえば、日産は最高命令の直後からキャッチーなコマーシャルを展開しており、ユーチューブ上に投稿された、女性の運転をテーマにした動画は一見の価値があるだろう<sup>(14)</sup>。

なお、サウジアラビアで行われたアンケート調査では、小型・中型車の女性人気が高いことがうかがえる。事故の被害を最小限にするために、大型車を買うことが多いのではないかとの推測もあるが、アンケートでは小型SUVやクロスオーバーなどに人気が集まっている。メーカー別では、国内市場を反映したかたちで、トヨタの人気が高いようである（レクサスを含めれば、トヨタ優位はさらに強まる）。

また、女性が運転するようになれば、従来、サウジ人家庭の多くが雇っていた外国人運

---

(13) <http://www.arabnews.com/tags/saudiwomencandrivepoll> (2018年7月31日閲覧)

(14) <https://youtu.be/NtLHigLmXNo> (2018年7月31日閲覧)。その他、英語によるアンケート調査では *Driving Ban Survey Saudi Arabia: Attitudes towards the Lifting of the Ban on Women Driving in the Kingdom* ([https://www.ipsos.com/sites/default/files/ct/news/documents/2017-12/women\\_driving\\_ban\\_survey\\_-\\_ipsos\\_in\\_ksa\\_2017\\_0.pdf](https://www.ipsos.com/sites/default/files/ct/news/documents/2017-12/women_driving_ban_survey_-_ipsos_in_ksa_2017_0.pdf)) や *Women driving the transformation of the KSA automotive market* (<https://www.pwc.com/ml/en/publications/documents/women-driving-the-transformation-of-the-ksa-automotive-market.pdf>) などがある。

転手が職を失うことになり、彼らは転職や出国を余儀なくされる。その数は130万人ともいわれている。そして、彼らに支払っていた給与は、他の支出へと振り向けられる可能性も出てくるだろう。その額は330億サウジリヤール（約88億ドル）にものぼるとの試算がある。女性が新たな移動手段を得たことを考慮すれば、娯楽や旅行などへの支出が拡大することも指摘できるだろう。

そのほか、直接的な影響としては、新しい産業、商品として、女性向けの自動車教習所や女性向けの自動車保険なども考えられる。とくに前者については、すでに大学などを中心に教習所がいくつも設置されている。また、自動車用のアクセサリーも、女性向けのものの需要が拡大すると予想されるだろう。

また、間接的な影響としては、女性の就労形態が大きく変化することが予想される。もちろん、女性の通勤が大幅に楽になるのは当然であろう。ただし、仮に自動車の数が増えるならば、渋滞がひどくなる可能性も指摘できるし、当然、事故の増加も考えられる。とくに、女性ドライバーを標的にした嫌がらせが増えることも否定できないだろう。

一方、雇用する側からみれば、女性を雇いやすくなるため、女性の雇用が増加する可能性がある。報道では、5万人の女性の新規雇用といった景気のいい数字も踊っているが、このあたりは希望的観測も含まれているといわざるをえない。しかし、たとえば、ウーバーやカーリムなど配車サービスは女性運転手の利用を表明している。運転免許を取得したり、車を購入したりする予定のない女性たちにとっては、女性ドライバーによる配車サービスは決して悪い選択肢ではないだろう。その他、大学、ショッピングモール、スーパーマーケット、企業等では女性ドライバー向けの駐車場の整備も進められており、都市部における交通事情が変化することも予測できる。

## おわりに

女性の自動車運転についてしばらくは賛否両論、たがいに激しく応酬する状態がつづくであろう。短期的にみれば、前述の放火事件のような突発的な否定的影響も出ると思われるし、初心者ドライバーが一気に道路上に出てくるので、交通事故の増加も考えられる。いずれにせよ、女性の自動車運転がサウジアラビアで当たり前になるまではしばらく様子を見守っていく必要がある。

だが、重要なのは、サウジ女性の解放が、運転解禁で完了したわけではないことだ。女性の運転禁止の根拠の一つにもなっていた、いわゆる後見人制度については、だいぶ規制が緩和されたとはいえ、大枠としては存続したままだ。女性たちは、たしかに自動車を運転できるようになったのだが、そもそも外出の際には依然として男性後見人（父親、夫、兄弟、息子等）の許可が必要なのである（現実には近場で買い物やルーティンの子どもの送迎であれば、女性が後見人の許可なく出歩くこともあるのだが）。

バンドル・ビン・スルターン王子（元駐米大使，元総合諜報庁長官）の娘で，スポーツ総合委員会副議長でもあるリーマー王女は，現政権内でもっとも影響力のある女性の一人とされているが，CNNとのインタビューで「後見人制度に関する批判的議論はすでにサウジ国内で起こっており，喫緊の問題である」と述べている。女性の人権問題についていえば，むしろこちらのほうが本丸といえるかもしれない。

\* 本稿の内容は執筆者の個人的見解であり，中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。